

友情、愛情、義理、人情、なにもなくても根性

山下 完和(やました まさと)

(2002年3月 TOYOTA ABLE ART FORUM
トヨタエイブルアートフォーラムから考える
エイブルアートムーブメントのこれまで・これから
執筆原稿)

やまなみ工房との出会い

私は焼き物で有名な信楽町の隣町、滋賀県甲賀郡甲南町の知的障害者通所授産施設「やまなみ工房」でスタッフをしています。やまなみ工房は、10年の無認可共同作業所時代を経て、1997年に法人化されました。開所当初は通所者3名でしたが、現在は、入所希望があれば必ず受け入れるという方針のもと、40名の方が利用されています。

下請け作業は一切せず、モノづくりにこだわり、縫製や紙すき、クッキー作りや野菜作り、そして私が担当している「ころぼっくる」という班では、絵画や陶芸を主な活動内容にしています。現在、10名のころぼっくるのメンバーは、各自好きなことを自分のペースで楽しんでいます。

私がやまなみ工房にお世話になったのは、今から16年ほど前でした。遊びに来たまま居ついてしまいました。もちろん障害のある人たちと接するのも初めてでしたし、ましてや福祉の世界に興味を持ったことすらありませんでした。しかし、工房を訪れたときの居心地のよさからやまなみでの生活が始まったのです。

その頃のやまなみは、主に下請け作業を中心に共同作業所として活動していました。細い紐を金具に通し、1本1円の仕事です。多い人で1日200本、少ない人では1日3本にしかありません。しかし、メンバーたちは、やまなみに通って働くということを喜びとし、また各自に役割もありました。ですから、私も授産活動といった視点では、それなりに成果も上がっているはずだと思い込んでいたのです。

しかし、売り上げを上げることや、多少押しつけがましい社会参加といった名目のもと、スタッフが一方的な願いを持ち、力を注いでいたにすぎません。スタッフ側の満足感や達成感ばかりが優先されていたように思います。それはメンバー一人ひとりの思いや個性からは遠く離れていました。

ころぼっくる誕生

そんな疑問をもつことになったのが、三井啓吾さんの行動からです。啓吾さんは、自閉症とされ、私と同じ時期にやまなみにやってきました。彼は内職も上手で、スタッフの指示通り問題な

く仕事をこなしていました。

ところがある日、少ない空き時間に、今まで見たこともない楽しそうな顔をして、鉛筆で一生懸命何かを描いていたのです。「仕事しよか」の掛け声ですぐさま仕事に戻った啓吾さんが残した紙を見たとき、私は面白いと感じたのです。またそれ以上に、とても楽しそうな啓吾さんの顔が忘れられませんでした。

その時はもちろん、アートという視点で啓吾さんの絵を見ていたわけではありません。しかし、同時に「啓吾さんの本当に好きなことは何なんやろ?」「僕らに自分の気持ち言えてるのやろか?」と自問せざるを得ませんでした。

作業を中心に過ごす中、次第にその落書きがとても大事に思えてきました。啓吾さんやメンバー一人ひとりの生きる喜びや楽しみ、その人の価値観や個性、時間の使い方やその日の気分といったことを今まで大切にしてきたのか、これまで一方的に何をしたらいいか、何をさせるべきかを主役である啓吾さん達を差し置いてスタッフだけで考えてきたのではないだろうか。そこでみんなは何が好きなのか、何をしたいのかを一緒に探すことにしました。

そんな時ころぼっくるが生まれたのです。メンバーは、やまなみの中では比較的障害は重く、もっとお給料が欲しい、働きたいといった願いではなく、それよりはもっと何かがしたい、友達と仲良くなりたいといった思いが強い6名でした。彼らは、下請け作業をそれほど器用にこなせません。

しかし、「障害が重いから」「作業ができないから」といって班を独立させたのではありません。私たちとしては、一人の人として自分の好きなことを一生懸命できる場を作りたかったのです。何を体験してもらうかや、場の設定はこちらが先頭に立つこともありますが、一人ひとりに合わせた活動内容にしました。

彼らの好きなことは、散歩やドライブなどさまざまです。「今日は秀さんの好きなこと」「今日は正巳の好きなこと」といって、日替わりで各自の好きなことをメンバー全員で楽しみました。

そんな事をしている時に粘土に出会ったのです。私も粘土に触るのは初めてでしたし、メンバーの誰もが好きだったわけではありません。しかし、とても楽しそうに叩いたり、握ったりする中で、メンバーみんなの生き生きとした顔がそこにあったのです。私には、粘土が作業の一つになればいいという思いが湧いてきました。

信頼関係が深まる創作活動

ところが、活動が始まった当初のことです。悲鳴に近い声を私が上げてしまいました。同じ班としての意識もなく、この部屋でこの人たちとやりなさい、好きなようにしなさいと粘土を渡され、彼らに何ができたでしょう。メンバー達はきょとんとして何も始めません。

私は、もし自分が逆の立場だったらと思うとできないはずのことを彼らに強いていたのです。知らずに自分がまたもや上位者になり、下請け作業と粘土造形を置き換えただけの活動になっていました。

それからは常にその人の立場、心の声を聞くといったことに注意するようになりました。無心になったのです。私は粘土や絵画といった芸術に興味はありませんでしたし、専門知識もまったくありません。彼らが制作したものを見て、「これはいいな」「それは面白いな」と言ってみたり、逆に、「これはあんまりやな」といった程度の感覚しか私にはありません。もちろん売れる売れないとかいったことも頭にないですし、その日をどう楽しく過ごすかだけです。ところが気が付けば自分が一番楽しんでいるのではないかと思うほど日々生まれる何かに対しワクワクしているのです。

班を独立させた当初は、外部からの批判めいた声もたくさん耳にしました。「あの班は遊んでばかり」「あの班は今月も授産ゼロ」と。保護者からも「そんなことさせないで字の一つ、職の一つ覚えさせて。」と非難されたこともあります。メンバー達が自信ありげに出した作品を見ても何の感心も示されませんでした。

しかし、私は批判を横目にしながらも、メンバー全員が以前より生き生きとし、楽しんでいたり、お互いの気持ちが分かり合えるようになっていくと強く確信していたのです。

徐々に信頼関係が強まってきているのも感じ取れていました。同時にメンバー同士が自由に振る舞えたり、安心感や緊張感を持ったり、やる気にさせるような場所作りも進んできました。創作においては、場所作りも重要です。活動を始めてから半年間ぐらいで畑に砂利を入れてレンガを積み、廃材を利用してメンバーたちとアトリエを建てました。メンバー達が自由に使える場所作りは、彼らにとってもいい経験でした。

ころぼっくるの創作活動は、作品としての売り上げが上がっている今でも「うまいか下手か」「売れるか売れないか」といった評価は意識していません。それよりもメンバー同士がいかに関心し合えるか、達成感を共有できるか、その時通じ合えるか、そして素直に自信を持って自分を出せるか、といった側面を重要視しています。

生き様こそがアートになる

彼らの選択範囲が非常に狭いのも問題です。例えば自分にあった画材をいろいろな店で彼ら自身の目で探すことは難しいことです。こちらが画用紙とクレヨンしか用意していなければその画材だけで描き続けるしかありません。

スタッフ側がつい楽をしてしまうのはここです。紙にただ描くといった行為にとどまらず、様々な画材を常にたくさん用意することです。使わせるのではなく、使わなくても用意はしておいてください。彼らに自分で選択するという状況を作っておくことが大切なのです。

またその人の興味の有無に関係なく、様々なところに一緒に出ては盛り上がることもしてみてください。ですから、創作においても思いっきりがんばったりするだけでなく、時には思いっきりさぼったり……。泣いたり、怒ったり、と生きることを実感することが重要なのです。つまり、その人の生き様こそがアートなのですから。

こういった活動を通して、下請け作業では見出だせなかったことを新たに発見し、メンバー

それぞれの成長を、そして彼らから学び共に人間として成長する自分を実感することができました。また、メンバー同士に連帯感がいつしか生まれ、お互いに自分をさらけ出せるかけがいのない存在になったのです。こういった人と人としての当たり前の関係が今の福祉には少ない気がします。

いざ外に出ると彼らは不自由なこともたくさんあります。しかし、アトリエにいる彼らを見る限り、そこにはもう自閉症や障害者といった言葉は必要ありません。

今も生まれくる次々の作品や、その人の過ごし方には素直な自分自身の気持ちを伝えることしかできません。しかし、その人の人としての素晴らしい部分、一人ひとりの生き様に日々敬意を表し、憧れを抱き、その人間性に魅了されています。

今まで多くの失敗もあったでしょう。無駄に見える回り道もあったでしょう。しかしそういったことが後に力になり、日々何かを感じることで生きることを実感できる日々が創られているのでしょう。10年近く共に過ごせているのも大きな宝です。なぜならお互いを理解するには共にする時間も必要であったと今思います。大切なのは、互いの信頼関係です。人と人としての…。それが無い限りは形となって表れるどころか何も見えてこないでしょう。私に課せられた課題は、みんなに必要とされ、信頼される一個人であり続けることであり、私自身が何でも言える存在であること、ひとりの大人同士としてのごく当たり前の尊重、周りの社会がみんなを一足飛びに決まりきった輪の中に閉じ込められるようなことにならないように…

大切なのは、メンバー一人ひとりであり、その人の心の中にあるもの、それを互いに大事にすることで次の何かが形として生まれてくるのだと思う。その生まれたモノに対し、ありのままの気持ちと愛情を注ぎつつ、これからも人生の豊かさや質に目をあて、人間関係を大切にのんびり楽しく過ごしていこうと思います。